

Eureka IX

六年制通信 No.5 令和3年5月14日(金)号

マンボウ

GW中に何時間探しただろう。やっと見つけたときには声が出たね。

いや、このところ新聞でもテレビのテロップでも「まん延防止…」を見ない日はないのですが、私は何が嫌いと言ってこの「まぜ書き」ほど嫌いなものはないのです。不愉快極まりない。バカにしているませんか、これ。「蔓延」くらい漢字で書けばいいではないですか。何ですか「まん延」で。漢字の「蔓」は「植物のつる」から「はびこる」という意味を持つわけで、ひらがなの「まん」に何の意味があるのでしょうか。ちなみに四大紙では産経新聞だけが「蔓延防止…」と書いているようですね。

いつもの新明解国語辞典にはなかったのですが、新潮現代国語辞典では「まぜ書き」とは「漢字で書ける熟語を、漢字と仮名とをまぜて書くこと。『誘かい』『だ捕』の類」なのですが、この「まぜ書き」を徹底的に批判した文章があったはず、昔読んでいたく感動した記憶があるからと思い、その本を探していたわけです。著者のあたりを間違ったせいで一向に見つからなかったのですが、やっと手にできました。それが高島俊男さん（つい最近お亡くなりになりましたね）の『本が好き、悪口言うのはもっと好き』（文春文庫）です。この本で高島さんは講談社エッセイ賞（第11回）を受賞しています。文庫の72ページに「いやじゃありませんかまぜ書きは」という文章が8ページにわたって載っています。今回は私の、というよりは高島さんの主張を私がまとめてお伝えしましょう。（いっぱい気分の悪くなる例が出ます。ご注意ください！）

まず、訓で読む語および音と、訓を取り合わせた語は漢字とかながまじっていても「まぜ書き」とは言わないとして、「肩こり」「鼻づまり」「ひき肉」「ほうじ茶」を挙げています。最近の新聞から拾ったものとして、あ然、安ど、位はい、えい航、えん堤、花き、かい離、覚せい、かく乱、がく然、かん口令、干ばつ、完べき、危ぐ、き然、急きよ、金ぱく、けん引、けん制、こう着、こう配、こん身、混とん、さい銭、さい配、山ろく、残がい、ざん新、刺しゅう、し烈、しつ責、終えん、収れん、処方せん、信びょう性、親ぼく、席けん、せん定、そ上、巣くつ、装てん、僧りよ、脱きゅう、胆のう、ち密、ちょう報、ちょう落、てん末、同せい、は種、破たん、はく製、はく離、ぱく大、抜てき、ばん回、晩さん会、範ちゅう、伴りよ、秘けつ、被ぼく、ふ化、ふ頭、風さい、復しゅう、沸とう、補てん、ぼう然、まん延、めい福、黙とう、薬きょう、憂うつ、ら致、漏えい、ろう城、これらを挙げています。以前は誘かい、ゆ着が目についたが最近は漢字で書いているとも指摘しています。よくまあ、こんなに例が出せますね。私は「遡上」を「そじょう」、「巣窟」を「そうくつ」と発

音できますが、「そ上」や「巢くつ」では「そうえ」「すくつ」になってしまいます。

この醜いませ書きの問題点を高島さんは二つ指摘しています。一つは昭和 21 年の「当用漢字」（今は「常用漢字」）は本来強制力を持たなかったはずが新聞や官庁関係と教育関係がそのまま受け入れたこと。例えば「狼」という字は「狼狽する」にしか使わないので、「うろたえる」とすれば足りる、何も一通りにしか使えない漢字を覚える必要はないと、これが当用漢字の制定者の言い分。であるならば、遡上は「さかのぼる」、播種は「たねまき」と言い換えればいいのだが、これを「そ上」「は種」としたところが間違いである。文字の制限は事実上言葉の制限であるところも見逃してならない。もう一つは、「やま」「かわ」「たかい」「のぼる」などの和語（日本語の大和言葉です）は音（おん）事態に実体がある。山、川、高い、登る、などと書かなくても音で理解ができる。しかし漢字の音による言葉は違う。例えば「ちょう」という音は固有の意味を持たない。長寿の「ちょう」なら長い、懲罰の「ちょう」はこらす、調査の「ちょう」は調べる、挑戦の「ちょう」はいどむ、諜報の「ちょう」はスパイ、凋落の「ちょう」はしぼむ、早朝の「ちょう」は朝、記帳の「ちょう」はノート、予兆の「ちょう」はきざしである。これらの語では実体を担うのは、長、懲、調、挑、諜、凋、朝、帳、兆の字である。「ちょう」という音は、漢字を得て初めて意味を持つ。ですから「ちょう落」と書いて、この「ちょう」はしぼむの意であると了解せよというのは無茶である。大和言葉のように本来は音が言葉の実体（意味）であるべきを、外来語である漢字の音ではなく字に意味を持たせてしまったがためにややこしいことになってしまったのです。以上、私も高島さんに全面的に賛成です。

今週のおすすめ

・水野敬也 『顔ニモマケズ』（文響社）

ふざけた書名だと思いましたか。あの『夢をかなえるゾウ』の作者ですからね。サブタイトルは『どんな「見た目」でも幸せになれることを証明した 9 人の物語』。「はじめに」はこんな出だしです。あなたは、「自分の外見がもっと美しかったらいいのに」と思ったことはありませんか？

中高の時代、私たちは他人の目に（特に異性の目に）自分がどう映るかを気にします。自分が魅力的なのかどうか（特に見た目ですけど）悩みますね。

この数年で読んだ中で、私はこの本が最も印象に残っています。このタイトルを、最初はよくないと思っていたのですが、読んだ後には納得していました。そして君たちに読んでほしいと強く強く思いました。もう何年も前のことです。ただ、君たちが正しく読んでくれるか自信がなくて少し躊躇していたのです。でも、やはり図書館に入れておきますね。何かで悩んでいる生徒（友人関係でも何でもいい）、自分に自信のない生徒、手に取って読んでごらん。感想を聞かせて下さい。

ギリシア哲学の田中美知太郎は東京の空襲で九死に一生を得たのですが、顔にひどい火傷を負います。実は私、一度お会いしているのですが、近くで正視するのが少し苦しいくらいの傷跡です。しかし、その知力でもって苦しみを克服し、誰もが敬意を払う大学者になられました。読みながら、そのことを思い出していました。

BGM は フランク・ミルズ の 街角のカフェ でした…。